

『教理問答』はルター派のものなのか

著者	岡本 崇男
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	71
ページ	2-2
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000574/

『教理問答』はルター派のものなのか

すでに〔第一部〕において、シモン・ブドニと『教理問答』について簡単に紹介したのであるが、この文献がルター派のものなのか、それともカルヴァン派のものなのかという問題は解決されないままであった。〔第一部〕が出版された当時、信頼できる包括的なブドニ研究として利用できた文献は、[Kot 1956] と [Frick 1995] のみであった。これらの研究はいまだに価値を失っていないと思われるが、1562 年の『教理問答』に関する記述は、いずれにおいてもごく僅かである。その理由はおそらく、改革派の活動家として聖書研究に取り組むうちに、三位一体を否定するに至った「背教者」としてのブドニに研究者たちの関心が向けられていたからであろう。ブドニは、少なくとも 1562 年の段階では、教理教師として三位一体を擁護していたのだから、まだ本格的な活動が始まっていなかったとみなされても不思議はない。

しかし、最も新しい研究である [Kamieniecki 2002] では、「文章家としてのブドニのデビュー — ニェスヴィジの教理問答書」と題する一章が設けられており、そこで教理問答書という文献ジャンルが成立した経緯、ブドニの『教理問答』の神学的内容、そして言語について説明されている。この研究によって、ブドニの教理問答書がルター派とカルヴァン派のどちらに属するものなのかという〔第一部〕で解決できなかった疑問にたいする答えを得ることができる。この問題について、カメニェツキは次のように述べている。「また次のことも強調しておかなければならない。すなわち、本書のテーマとなっている著作はカルヴァン派のものであって、この教理問答書をルター派の理念と結びつけるのは誤解なのである。なぜなら、特に十戒の命令の分け方と正餐式の教義の提示の仕方を見れば、あきらかにカルヴァン派の教えを伝えていることがわかるからである」[Kamieniecki 2002, 26]。ただし、ブドニがカルヴァン派の何らかの文書を東スラヴ語に翻訳したということではないらしい。むしろ、「カルヴァン派の教義が直接言明されているのではなく、この教理問答書のいくつかの箇所で行うことができる」[Kamieniecki 2002, 27] 程度であり、さらにブドニ独自の見解が付け加えられていると指摘されている [ibid., 27, 34]。従って、やはり『教理問答』は、ルター派のものではなく、ブドニの宗教活動の過程で、彼がカルヴァン派に近い考え方を持っていたときに執筆・出版されたものだと考えてよさそうである。

岡本崇男